

## R4 総括コメント（音楽学部）

専攻・コース名	職名	氏名	総括コメント
作曲	教授	小林 聡	全ての項目について努力を続けたと思う。今年度途中からCOVIDの制約がかなり緩められたため、作品発表や本学の交際交流のために渡欧することができた。タンペレ応用科学大学とヨーテボリ大学を訪問し、今後の協力関係等について協議した。また、自ら窓口になり、客員教授や海外の演奏家を招聘した。本学と地域社会との連携についても、本学の特色を生かしながら、地域社会に貢献できる方法を考えた。
作曲	教授	山本 裕之	COVID-19によるオンデマンド・オンライン授業の一般化が促進されたことにより、対面移行後もこれらの技術はツールとして残されていることから、COVID-19が収束した後も積極的に使用することを考えても良いと考えている。ただし本学で使用されているLMSであるGakuenシリーズ（ユニパ）は欠陥商品であるため、早急にまともなシステムに変えるべきである。そうでないとCOVID-19期間中に培われた遠隔授業のメリットが活かされない。
作曲	准教授	成本 理香	今年度も、様々な大学運営業務が日々降りかかってくる中で、コンスタントな作曲、企画、研究等が行うことができ、充実した年となったと考える。全体的に概ね目標は達成できたと思うが、「クロスジャンル」をテーマとした研究の進みがあまり芳しくなかったため、来年度の研究の最重要事項としたい。大学運営では職員も教員も多忙を極める状態が続いているが、もう少しすっきりと仕事を整理する必要があるだろう。一部の部署、職員、一部の教員に過剰に仕事がかかる現在の状況は決して健全ではなく大学全体で考えるべき事項であると考えている。
作曲	准教授	安野 太郎	研究活動ではピアノのための作品制作をとおして、Wave form Compositionという作曲法を発明した。今後は紀要などまとめていきたい。電子音楽スタジオについてはこの2年間で一通りの機材、設備について把握したので、来年度からのさらなる教育への応用と発展に努めたい。作曲コースの広報に関しては、今年度抜本的に更新したwebや大学案内における紹介文などが、これから各方面でどのように受け止められるのか注視していきたい。
音楽学	教授	東谷 護	今年度は50年前の音楽文化に関わった無名の人の日記を整理し、資料論文として発表した。これまで当時の実態が不明瞭なことが多かったのだが、この資料論文によって、今後の研究が発展することが予測できる点において、研究活動については高く評価したい。教育、運営においても成果や時間をかなり割いたという点において、評価したい。しかしながら、これらに多くの時間が割かれたため、社会貢献にまで手が回せなかった点は来年度以降の課題として残った。総じて、今年度はコロナ禍で、よくやったと思う。
音楽学	講師	七條めぐみ	研究活動においては、複数の競争的資金を獲得し、研究環境を整えるとともに、資料の収集・分析を行い、その内容を2本の論文として発表した。教育活動では、卒論5本、修論1本、修了論文19本の指導を行うだけでなく、共通科目「西洋音楽史概説」では第2次大戦後に書かれた音楽作品を毎回紹介するという手法をとり、これまで手薄になっていた分野の充実を図った。さらに、社会貢献として、「病院アウトリーチプロジェクト」では新たに豊田西病院とよつ葉の家に大学院生を派遣し、大学と地域社会の関係づくりを行った。
声楽	教授	中巻 寛子	本年度はコロナ禍の状況がある程度落ち着きを見せて来たことに伴い、研究活動において、成果発表としての演奏会を開催できたことが大きな収穫であった。教育活動、大学運営、社会貢献に関しても、そこに全力を尽くし、一定の貢献をできたものと考えている。
声楽	教授	森川 栄子	昨年度に引き続きコロナ禍下での1年間となったが、教育面においてはこれまで以上の成果を挙げることができたといえよう。研究面においては引き続きネガティブな影響を受けつつも、リサイクルを実施することが出来、今後の活動へと繋げていくことができた。その他の演奏発表活動や、例年実施してきた海外研修が行えなかったことは非常に残念であるが、次年度以降に実施すべくそれぞれ計画中である。

## R4 総括コメント（音楽学部）

専攻・コース名	職名	氏名	総括コメント
声楽	教授	小原 啓楼	昨年までと同様、教員・学生・事務局の三者の協力によって、長引くコロナ禍のカリキュラムへのダメージはかなり抑えられていると感じる。しかしそれ以外の活動やコミュニケーションへの制約は、引き続き重大な影を落としており、オフィスアワーに限らずカウンセリングを逐次取るなど、学生のベネフィット向上のために出来る限りの配慮をしてきた。また、既に進行しつつあるマーケットの不可逆的変化に対応すべく、新たな価値観に基づいた示唆・コーチングを目指し、さらなる具体的実践例を心かげている。しかし長引くコロナの影響もあってか、心身のケアが必要な場面も多く、フィジカル・メンタル両面でのケアのための実践的なメソッドがさらに求められた一年であった。
声楽	准教授	川島 幸子	コロナ渦の中、2度の延期を経て、2023年2月21日に私が企画・演奏した芸術講座「川島幸子が歌うミユン&オフィーリア」を開催することが出来た。本学客員教授のアグステイーニ先生をはじめ、白石禮子教授・桐山建志教授・花崎薫教授・渡邊玲雄准教授と弦楽コースの先生方との共演、また作曲コースの成本理香准教授によるこのコンサートのための新曲を委嘱し世界初演など、先生方の多大なお力添えのおかげで、素晴らしい演奏会となった。この場を借りて共演してくださった先生方へ心から感謝申し上げます。
声楽	准教授	初鹿野 剛	教育活動、大学運営、研究活動（のうちコンサート本番）、社会貢献とも全力を尽くし、関係各方面に一定の貢献をすることが出来たかと思う。ただ、基礎的な研究に割ける時間は全くなかったため、来年度は時間を創出し、少しでも出来るよう努めたい。
声楽	准教授	森 寿美	研究活動、教育活動、社会貢献において年々活動の幅が広がり今年度も充実した活動を行えることができた。大学運営においても引き続き積極的に取り組みたい。
ピアノ	教授	熊谷 恵美子	9月にドイツに研究発表として演奏会を行なった。これからも研究は続けていきたいが、1つの区切りとしては大変有意義だった。演奏会以外の資料集めや大学教授から得られた情報は、教育面でも大変役立ち、今後も研究と教育の関わりを深めていきたいと考えている。
ピアノ	教授	北住 淳	コロナ禍の社会が徐々に経済活動を回復させる中、芸術文化活動の在りかたにも抜本的な見直しが要請されているように感じる。自然発生的に場が生まれるのを待つ活動その流れの中で立ち上げるのではなく、大学こそが場となり、そこでは常に芸術の様々なアクチュアリティが保たれ・展開されている、ということが、「以前への復興」ではなく「新しい様式」であり本来の地域文化活動への回帰ではなからうか。残る本学での活動期間、「場としての愛知県立芸大」の可能性に視点を置き、意を尽くしたいと思う。
ピアノ	教授	掛谷 勇三	研究活動では可能な限り研究時間を割いて取り組んだ。次年度残り3回の演奏企画に向けて継続してゆく。教育活動では成長が見られた学生が多かった。施設整備委員会で音楽学部にも何も貢献することができなかったことなど、大学運営には役立てなかった。社会貢献では教育連盟の活動に一部加わることができた。
ピアノ	教授	内本 久美	学内外でのコロナ感染防止対策を徹底しつつ国内外で活発な研究活動を行った。来年度も学生に対する丁寧な指導は勿論、大学運営に関する業務等々の円滑な遂行を目指したい。
ピアノ	教授	鈴木 謙一郎	概ね達成できた。前年度よりコロナの収束傾向がみられ、授業形態ももとに戻つつあるため、学生も意欲的に勉強に励むことができた。
ピアノ	准教授	中尾 純	スクリヤービン記念国際ピアノコンクール（旧ソ連諸国以外から初の）上位入賞者として、長年研究を続けて来たスクリヤービンのソナタ全曲演奏会（全3回）を完遂した。教育においても在学・卒業生のリサイタル開催やコンクール入賞が相次ぎ、実り多い一年であった。

## R4 総括コメント（音楽学部）

専攻・コース名	職名	氏名	総括コメント
ピアノ	准教授	武内 俊之	どちらかというと学生教育に重点を置いた年度であったが、特に18名に及び担当専科学生への指導を達成できたことは、評価できると判断する。得られた経験やまた反省点等も活かしつつ、より良い教育活動に向け、誠実に取り組んでいきたい。
弦楽器	教授	福本 泰之	コンサート実施、出演、社会貢献において、コロナ前に着実に戻りつつあると実感した1年であった。ただ、学生との距離感はまだまだ元通りとは行かないようだ。総じて充実した1年であったが、まだまだやり残したことや反省点も。
弦楽器	教授	花崎 薫	たくさんコンサートを通じて研究発表をできた。ベートーヴェン、チェロとピアノのための全集のCDのリリース、2013年に当時のピアノフォルテ、チェロで録音したCDに続き、今回はモダン使用のピアノとチェロ、同一奏者による2種類の異なるスタイルでのCD録音はあまり例が無く、意義の有る研究発表であったと思う。定年退職に向け3回企画した「室内楽の響演」シリーズも皆さんの協力を得て充実した物にしたいと思う。
弦楽器	教授	白石 禮子	近年、新型コロナウイルスの影響で演奏会のキャンセルや延期が続いたが、今期はほぼ計画通りに研究活動を行うことが出来た。教育活動としては、コロナ感染予防に引き続き注意をはらいながらしっかりと対面レッスンを行ったが、学生は皆、自身の練習やレッスンに真剣に取り組む、神戸財団賞受賞（博士前期課程修了生）や協定校への留学（学部4年生）、学外コンクール入選等、学内外で成果を挙げた。社会貢献では、学外で開催されたオーディションやコンクールの審査を計画通り行った。
弦楽器	教授	桐山 建志	研究活動では、菟野ピアノ歴史館との連携により、多くの成果をあげることができた。大学運営では、弦楽器コース主任としての責務もはたすことが出来たと思う。
弦楽器	准教授	渡邊 玲雄	コロナ感染対策も3年目となり、コロナとの付き合い方を考えながらレッスンや授業に臨んできました。演奏委員長として、大学の学外での演奏会に携わることが多かったですが、東海地域のもっとより多くの方々に芸術文化の期待を担う若き芸術家の息吹を感じてもらいたいと思いました。大学ホームページもリニューアルしますし、来年度は演奏会の告知宣伝にも力を注ぎ、学生の日々の努力の結晶が多くのお客様の前で披露できる機会を、授業と大学運営双方から模索していきたいと考えています。
管打楽器	教授	倉田 寛	令和4年度前期末に体調不良があり、手術・入院・通院など自己研究においては足枷になってしまったが、その分今までは違う見方で研究と向き合うことができた。特に教育・社会貢献においては、昨今の働き方改革において部活動が制限され、より専門性の高い指導が求められるであろうと予想される。今回多くの中高生に音を聴かせ技術を教えられたことは、自分自身においても多くの気づきがあり、今後の育成に繋がると確信できた。現在の本大学教育機関を通しての育成は、地域社会貢献においても大きな役割を果たし、学生のキャリア支援としても充実していると感じる。芸術文化を育む担い手として、この教育は近い未来大きく育まれ、地域財産として必ず返ってくる信じている。
管打楽器	教授	深町 浩司	コロナの影響があり演奏活動の数が若干少なかったことが悔やまれる。実技レッスンを担当した学生が国際コンクールで3位入賞を果たし教育成果を内外に示すことができた点を高く評価する。また、「共鳴〜Kyo-meï」プロジェクトにおいて、各地の自治体やNPOなどと積極的に交流して活動範囲を広げた点は一定の評価に値すると考えている。
管打楽器	准教授	橋本 岳人	研究活動では、多数のオーケストラで首席客演を務めた他、室内楽、ソロ活動とバランス良く行う事が出来た。教育活動では試演会を多く開催したことで学生達が切磋琢磨し、実技試験やコンクール等に良い効果を与えた他、世界的なフルート奏者ペトリ・アランコ氏を客員教授として招聘することが出来、多くの学生に刺激を齎すことが出来た。また昨年度は多くのフルートコンクール、吹奏楽コンクールの審査員を務め日本音楽界に貢献した。

## R4 総括コメント（音楽学部）

専攻・コース名	職名	氏名	総括コメント
管打楽器	准教授	ブルックス 信雄 トーン	愛知県立芸術大学の運営、学生の指導と個人研究のバランスを取りながら、毎週大学に通って准教授を勤めています。
管打楽器	准教授	井上 圭	新型コロナウイルスの影響で停滞して活動が再開してきているのを実感できた。今後はより主体的な活動を展開していきたい。
教養	教授	水野 留規	ほぼ順調に研究・教育活動ができた。在職中に研究面での成果を出そうとしているので、翻訳に長時間をさいて、来年度に向けて弾みをつけた。学外の県民向け講座でも講義を担当し、社会的な貢献ができたことにも満足している。イタリア語に対する学生の関心は残念ながら以前よりも低下し、入学時の外国語にかかわる運用能力も学生間で大きな開きがある。そうした現状にはさまざまな要因があるが、海外に行きにくい昨今の状況も学生の取り組みに少なからぬ影響を与えている。しかし一部には熱心な学生もいて、その中の2～3名をB1レベルの水準にまで到達させることが出来た。紀要委員会における委員長としての仕事は例年にも増して大変だった。しかし本学教員の研究発表の場として紀要が適切に機能するために、改善すべき点についてはこの数年間でかなり手を入れることができたと思う。教養教育は現在1名が育児休暇を取得して休職中なので8名の専任教員を抱えているが、この三年間は議長として組織運営に携わっている。令和6年度末には私を含めて2名が停年を迎えるので、教養教育が今後どのような役割を教育面や大学運営の中で果たしていくべきか、大学全体で検討していくべきであろうと思う。
教養	教授	三宮 敦生	授業アンケートの結果によると、授業の総合評価に関する質問に対して、「非常によい」と答えた者のパーセンテージは心理学Aが83%、心理学Bが100%、教育心理学が66%と昨年より改善された。教職課程の運営に関しては、文部科学省の昨今の政策動向の把握に努めながら、『教職課程自己点検・評価』を三品准教授とともに完成させることが出来た。社会貢献面では例年行っている科学講座がコロナ禍で中止となった。
教養	教授	井上 彩	研究：これまで数年間の研究成果を執筆・出版できた年であった。科研費による研究課題の成果はドイツの出版社より刊行された論文集に掲載され、共同研究の成果は研究ノート（共著）として学会誌に掲載された。教育：今年度もすべての授業を対面授業で実施することができた。次年度は人数制限や欠席配慮などの対策も撤廃できるので授業内容もほぼコロナ禍前の状況に戻せるのではないかと期待している。大学運営：新型コロナウイルス感染対策も3年目となり、スムーズにコロナ禍前の状況に戻るよう徐々に対策を緩和している段階である。
教養	准教授	大塚 直	令和4年度もコロナ禍の影響が続き、また入試委員長としての仕事を優先させたため、予定していた海外渡航でのホルヴァート研究はできなかった。しかし継続して新ウィーン全集版および研究と関連する様々な図書資料を購入して論文を執筆していった。引き続き初期ホルヴァートの翻訳と研究を進めていきたい。
教養	准教授	三品 陽平	授業内容の改善についてはかなり取り組むことができた。また、大学運営に関しても目標を遺漏なく達成することができた。社会貢献については、コロナの影響もあり十分できなかった点もあるため、来年度からは再び対面による相談受付を充実させていきたい。